第 87 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

二〇二一（令和三）年度　学位記授与式式辞

学長　藁科　勝之

例年にない大雪から、ようやく雪解けが進むこの季節、弘前学院大学から、新たに若い有為な人材をお送りできることを、嬉しく思います。皆さん、ご卒業、おめでとうございます。

本年度の卒業生・修了生は、以下のとおりであります。

学部については、文学部－57名。英語英米文学科26名、日本語日本文学科31名、社会福祉学部－社会福祉学科41名、看護学部－看護学科65名、以上、学部卒業生163名、大学院については、社会福祉学研究科1名、文学研究科1名、以上、大学院修了生2名、学部・大学院、総計、165名の皆さんをお送りすることができました。

しかし、新型コロナの感染が、未だ沈静化しているとは言えない状況にあることを考慮し、1年前の入学式と同様、感染拡大を極力排除するために、3つの密を避け、保護者・同伴者の皆様や来賓の方々のご参列を見送らざるを得ませんでした。そこで、このように、皆さんと教職員のみの学位記授与式となりました。

このコロナ渦は、とうとうこれで2年が過ぎ、3年目に入ってしまっております。しかも、未だ衰えを見せておらず、本学においても、感染者が出ました。

しかし、こうした状況でも、この2年間、学生教育、授業関係においては、感染拡大を回避するために、対面式形態とともに、オンライン、オンデマンドも併用しつつ、講義・演習等の授業を進めて参りました。

さて、このコロナと戦い、こうして、今日の卒業式を迎えたわけですが、この間の、皆さんの努力はこれまでとは違って、並大抵ではなかったと思われます。しかし、それにもかかわらず成果をあげており、その1つは、就職状況にも現われております。

本年度の就職率は、就職希望者に対する割合で見ると、途中の段階ですが、学部学生の全体は90％に近く、昨年度が100％でしたので、極めて高い数字を維持しております。とりわけ、このコロナ禍で、社会生活上の制限がかけられているという厳しい状況だったにもかかわらず、いろいろ苦労なされたと思いますが、皆さんは頑張りました。この他には、資格試験・国家資格試験の合格率が、東北で1位となったという、誇るべき実績もありました。

こうして、きょうの卒業を迎えたわけですが、この「卒」とは何かと言えば、「終える・終わる」ことです。学業を「卒す」、終える、となりますが、実は、これは終わった、ということと同時に、始まりをも意味します。卒業式という儀式が始まったのは、今から150年前の明治初期ですが、当時は、次の段階に進む際の儀式だったようです。ですから次の舞台への始まりです。外国語でも卒業式を「始まりのセレモニー」と表現することがあります。

皆さんは、明日から、新しい生活の場に身を置くわけですが、そこでは、いろいろな課題が待っています。なかなか難しい問題も、当然やってきます。それらには、予め正解があるわけではありません。その都度、その都度、問題の大小を問わず、とにかくなんとかしなければ、という解決力が問われるわけです。

その解決のためには、協調性―すなわち、他の人と物事を上手くやっていくこと―とともに、協働性―つまり、組織的な協調態勢の中で主体的に動き、協力すること―ということが必要になるでしょう。そういう局面で、大学時代に培ったプレゼン力やコミュニケーション力が活きて来るはずですし、是非、活かして欲しいと思います。そして卒業後も努力して欲しいと思います。本学の卒業生の活躍が、テレビ、新聞等マスメディアに取り上げられることも増えてきました。例えば、パラリンピック出場者、作家・小説家、国際交流による友好・親善に関わるコンクール入賞などがありました。

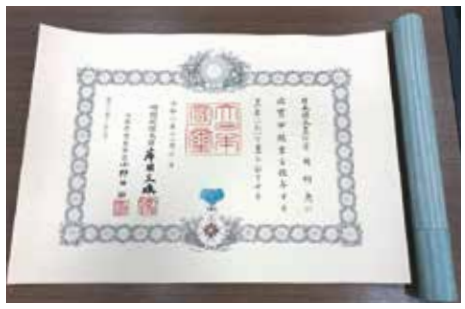
最後に、本学の建学の精神とそれに基づく教育方針を思い起こしていただきたいと思います。弘前学院の教育目的は、「すべての人を大切にする畏神愛人の精神をもって、すべての人と社会に対する責任を、積極的に果たす」としています。これは単なる謳い文句ではありません。私達が耳にし、目にする今の日本及び国際社会をみると、これがいかに大切なものであるかが分かります。

これを皆さんの門出にお贈りしたいと思います。

改めて、卒業おめでとうございます。

名誉教授 吉岡利忠先生「瑞宝中綬章」受章

令和3年11月3日付けで発令された令和3年秋の叙勲で、本学前学長の吉岡利忠氏が、公務等に長年にわたり従事し、功績を残した方に授与される「瑞宝中綬章」を受章しました。吉岡前学長は2004年4月から2021年3月まで本学の学長を17年間務められ、本学の発展にご尽力いただきました。現在は、青森市の医療三良会村上新町病院ならびにしんまちクリニックの院長として地域医療に貢献されております。



祝　大学院での思い出

社会福祉学研究科修士課程修了　吉川　真菜

2年間の大学院生活は、長いようであっという間に過ぎ去りました。私は、社会人入試を経て大学院へ入学した為、仕事と学生生活を両立することができるか、不安を感じる一方、私自身にとって大きな挑戦になると心を燃やしていました。

いざ学生生活が始まると、確かに仕事との両立は想像以上の大変さがありましたが、社会人であることを考慮してくださり夜間授業の開講や、図書館も遅い時間まで開館しており、私にとってはとても学びやすい環境が整っていました。また、講義を通して多くの先生方や先輩方との出会いがありました。課題に追われたり、思うように前に進むことができず悩み、不安に思うことも多々ありました。そのような時、励ましがあったことはもちろん、それのみならず私が次のステップへ進むことができるような、丁寧なご指導やアドバイスをくださり、再び前へ進み続けることができました。この出会いの中で、とても充実した時間を過ごすことができ、私の中では大きな財産となりました。

学生生活では講義を受けて様々な知識を吸収しただけでなく、「自分で課題を見つけ、そのテーマに沿って研究すること」が、大学院生には求められており、また、重要であることが分かりました。この重要さを特に大きく感じることができたのは、修士論文を通してです。自分で研究テーマを設定し、課題を解決へ導く為に、自分にできることは何か、そして導いたことを社会へ貢献する為にはどうすればよいか。課題を見つけ、解決へ導こうとすれば再び新たな課題と対面し、人間は学びの繰り返しであると体感しました。しかし、この繰り返しが重要であり、新たな研究を生み出すことができると学ぶことができたのも、この学生生活を通してでした。

この場を借りて、2年間お世話になった先生、先輩、事務の皆様には感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

文学研究科修士課程修了　斉藤　宏弥

思い出と言っても出席日数自体が少ないせいで、種類は正直そこまでないです。

その中ではやはり修士論文でしょうか。大学卒業の論文はだいぶ適当に片付けたこともあって、その時よりは頑張ろうと思い、授業なんかも取り組んでいました。漱石の『こころ』も含め、漱石について知見が広がったのは間違いないです。近現代の小説に興味がありましたし、漱石と言う取っ付きやすい題材を選んでくれたお陰で興味を損なうことなく授業を続けられたのはありがたかったです。

ただ、やはり苦しんだのも修士論文でした。本格的に取り組み始めるまでは、気楽と言うのも違う気はしますが、授業を学びの一環として伸び伸びと知識を蓄えたように思います。五月ころですかね。タイトル決めを始めて、実際に方向性が決まったあとは大変でした。それまでとそれからの知識を総動員して、自分の執筆する論文に落とし込む作業は想像していたよりずっと難関でした。当たり前ですが、適当に継ぎ接ぎするだけではそこかしこに矛盾が生じてしまい、何度も書いた文章が消えていきました。空回りしない為には知識量を増やして自分の論文に適合するものを見つけ出す。けれど、方向性が曖昧な上に知識量を増やすために多くの本を読みこんだとしても、空回りの回数が増えていく気がしてなりませんでした。おそらく、この地道な作業こそ試行錯誤と呼べる努力だと思います。しかし、努力の行き着く先が結果に結ぶと知ってはいても、時間経過による焦りと虚しさが募るあの手ごたえの無さはなかなかに堪えます。

そしてようやく論文発表となったわけですが、結構ぼろくそに言われました。けれどもあくまで形式的な指摘ばかりで内容に踏み込んだものは全然なかったことも手伝ってか、個人的には言いたいことを書けて満足している節が強いです。

それと上記の流れとは違いますが、たぶん一番印象に残るのは顧先生の出してくれたコーヒーだと思います。味は普通でしたが、コーヒーを飲むとやはり頭が切り替わるというか、僕のなかでそのスイッチみたいな役割を果たしたように思います。

研究紹介㊷

英雄伝説の研究

文学部　日本語・日本文学科　教授　入江　英弥

私はこれまで「オトタチバナヒメ伝説」とともに、「英雄伝説」の研究を行ってきた。具体的には、日本武尊と源頼朝に関する伝説を取り上げて、文献調査と現地調査によって、その実態といかにその土地に受容され、維持されてきたかを明らかにしようと努めてきた。今年は、ＮＨＫの大河ドラマのためか、頼朝への関心が高まっている。ここで、頼朝伝説を現地での聞き書きからご紹介したい。

神奈川県の頼朝伝説を調べてみると、逃走にまつわる話が多いことに気づく。大河ドラマでも描かれていたように、石橋山の合戦に破れ、山中を逃げ回る。そのときのエピソードを伝える話が真鶴（まなづる）町で次のように語られている。

「頼朝は、石橋山の合戦に敗れて、隠れ歩いた。真鶴のしとどの岩屋に隠れていたところへ、（先祖が）食事を運んだと言います。五つの味がしたので、『五味（ごみ）』という名字を与えたと言っています。」

この伝説は、賜姓伝説の一つとみられ、逃れてきた武将を助けたところ、その褒美として「五味」という名字を貰ったという内容である。頼朝びいきの土地柄であることを背景にして、当家が特別な家であることを頼朝への接待の話からアピールしようとしたものと考えられる。

その後、頼朝は海路、安房に逃れる。千葉県鋸南（きょなん）町竜島（りゅうしま）では頼朝の来訪に関して次のように伝えている。

「左右加（そうか）さんのうちに厄介になりましてね、帰るときにお世話になったから『安房を一国あげる』って言ったらしいんですよ。安房と粟を間違いましてね、『そんなものはいらない』と言ったらしいんですよね。それで頼朝さんが『そうか、ばかな奴だな』と言ったとかって。それで右左加という名字を頂いたんですね。」

逃げてきた頼朝を接待し、「左右加」という名字を貰ったという内容である。これも賜姓伝説の一つで、「安房一国（あわいっこく）」を「粟一石」と聞き違えたり、「そうか」という言葉をそういう名字を貰ったものと勘違いしたりして、頼朝との交流をユーモラスに伝えている。

頼朝は貴種でありながら、流人の身となる。旗揚げするもあえなく敗走し、艱難辛苦を味わうが、めげたくも天下人となる。すなわち、厄難を克服した、まれに見る開運の人物とみなされる。そうした偉人と少しでも触れ合いたいという地元の人々の意識のもとに、頼朝にまつわる話がさまざまに語られてきたのではなかろうか。

なお、これらの事例については、拙稿「相模の頼朝伝説―逃走伝説を中心として」（『民俗学論叢』第二四号　二〇〇九年五月）、「ムラの口承の世界―安房郡鋸南町竜島の頼朝伝説を中心として―」（千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』別編　民俗２　千葉県　二〇〇二年）で取り上げた。詳しくはそれをご覧いただければと思う。

談話室

「課題を発見する力を養うこと」

文学部　英語・英米文学科　講師　齋藤　章吾

私の担当科目は言語に関する学問です。特に、言語の文法、発音、意味に関係するものを扱っています。私の授業では、ヒトが何気なく使用している言語とはどのような仕組みを持っているのかを明らかにし、それを説明する理論について学習・考察します。理論を身に着けることでより体系的で深い理解を得ることができるのが魅力の一つではありますが、「理論」という言葉が持つイメージの通り少し難しい側面もあるかもしれません。そして、「理論を知らなくても問題なく言語を使用できている」という事実が、学生たちにとって理論言語学への敷居を高くしているように感じています。

確かに言語は基本的に誰でも問題なく使えるものです。しかし、その仕組みについてはまだ多くのことがわかっていません。例えば、母音と子音とは何か、それぞれどのように発音するのかといった問題は、言語を普段から自由自在に使用している人からすると思いつきもしないものかもしれません。

Thank youという英単語は小学校（もしくはそれ以前）から使用している表現ですが、２単語を区切って「サンク・ユー」と発音するのではなく、一つにつなげて「サンキュー」と発音する理由について考えたことがあるでしょうか。これらのような思いもよらなかった問題に気づき、その答えを理解することが、物事を深く考察し、より良い方向へと進めていく力につながります。大学では、「課題を解決する力」はもちろんですが、それ以上に「課題を発見する力」を養ってほしいと私は考えています。私の授業では、まず簡単な課題を通して問題意識をもってもらうことを大事にしています。

「課題を発見する力」は、日々の生活をよりよくするために必要不可欠な力だと思います。学生の皆さんには、この力を身に着けることで、日々の生活をよくするための行動をとれるようになってほしいと願っています。私の授業がその一助になれば幸いです。

卒業記念品として「２号館オンライン環境設備一式」寄贈される

学生・教職員から要望があったため、Wi-Fi等オンライン環境が整っていなかった２号館に2021年度卒業生一同より、卒業記念品として寄贈されました。

リカレント教育を終えて

看護学部　看護学科　教授　大瀬　富士子

看護学部では２００５年の創設当初から、弘前学院大学の「畏神愛人」の理念のもとに地域社会に貢献し、看護職の再教育と看護現場での研究サポート体制の確立を目指して「リカレント教育」を立ち上げて、17年が経過いたしました。そして、２０１５年から学校法人弘前学院より「リカレント教育」の継続と発展のために補助金を頂き開催しております。

これまでの活動と成果は、地域社会では看護職による研究手法の改善、研究発表の改善や増加です。第16回は「看護実践から見つけよう研究テーマ！～学会で発表しよう～」というテーマで行いました。今年度は初心者編とし、看護実践で生じた問いを研究に繋げるために、看護研究を基礎から一緒に学んでみませんかと問いかけ参加者を募集しました。研修内容は、看護学部佐藤厚子教授により『こんなものがあったらいいのにな』から始まる看護研究」のテーマで、ご自身の介護経験を研究に繋げ、さらに商品開発へと繋げるという興味深いものでした。さらに看護学部田中真実准教授により「看護研究におけるエクセルの活用の仕方～初心者編～」のテーマで、エクセルを使用し統計的データの扱い、検定をわかりやすく実践できました。

開催通知は全県下の保健医療機関へ、ポスター・パンフレットを郵送し、本学ホームページの他に、看護協会ホームページへ掲載させていただきました。これまでは講演会、アンケート調査などの量的研究・インタビューなどの質的研究を入れたプログラムで、３日間で行ってきましたが、コロナ禍で昨年度は中止せざるを得ませんでした。今年度は１日に縮小しハイフレックスで行うことを試みましたところ、遠方からの参加者が急増し51名でした。目に見えぬウィルスとの闘いである禍が転じてという思いです。ハイフレックスは感染収束後も有用であると考えます。

アンケートには研究指導を望む声が多く、近日中に希望者を確認し、研究指導へ繋げて社会貢献を発展させていきたいと考えています。リサーチクェッションから共に考えていくことで、臨床と大学での共同研究が進むことを願っております。

今後とも、看護職が抱える研究上あるいは業務上の悩み・ニーズを解析し、看護職の技術・知識の向上、地域社会の医療・福祉の改善、さらに看護職の後進育成のために、本学の「リカレント教育」活動を通して、微力ながら努力して参りたいと考えております。

オンライン授業実施状況の報告と今後の課題について

電子機器管理センター　木村　孝太郎

今年1月、全国的なオミクロン株の流行に伴い弘前保健所管内でも新型コロナウイルス感染者数が急増しました。こうした状況から本学では、危機管理委員会の判断により1月14日～2月2日の期間はオンライン授業に切替ることとなりました。また、教授会や各委員会の一部会議においてもオンラインで実施されることとなりました。

電子機器管理センターでは、２０２０年８月からオンライン授業に向けた準備を進めてきました。インターネット等委員会の委員の方々や弘前大学、聖愛中学高校の有識者にヒアリングを行いオンライン授業用アプリTeams（Office 365）の導入作業を行ってきました。２０２０年12月には、全学生・全教職員（約８６０名）のサインインアドレスを作成しスマホやＰＣにTeamsから全学生・全教職員への一斉通知が可能となりました。さらに、Teamsの操作手順書を作成し、アプリの操作方法について学生向け説明会や教職員向け研修会を実施しました。

また、２０２１年６月に、学務主任やインターネット等委員等で構成された遠隔授業等実施準備作業部会が立ち上げられ、オンライン授業が確実に実施できる環境づくりを目標とした検討や活動を行ってきました。

オンライン授業期間中、当センターでは、学生・教職員からの問合せが１２３件ありました。その内訳は、①Teamsの操作方法（チーム作成、予約、投稿、課題提出、動画再生等）が63件、②サインインアドレス・パスワードを忘れる・誤りが28件、③機材の借用依頼が17件、④操作・設定誤りが15件でした。

学生・教職員の問合せ等については、当センターだけではなく各課職員が機材設置・設定作業に汗だくで奔走し、先生方にもご支援いただき大きなトラブルもなく何とか対応できたと考えています。また、本学の学生・教職員のＩＣＴスキル向上にも繋がったと考えています。

しかしながら、問合せから見えてきた課題や厳しい意見もあります。例えば、オンラインで困難な実習がある、学内の機器・設備が不足している、サポート体制が脆弱である、情報セキュリティ・情報リテラシー、著作権に関する教育が徹底されていない等の課題・意見があります。今後、関係各所と連携し課題の早期的な解決・改善と更なる本学におけるデジタル化の躍進にも努めたいです。

大学生活や国家試験を振り返って

社会福祉学部　社会福祉学科卒　原田　彩希

四年間を振り返ると、様々な思い出があります。入学した当初は、どのような新生活になるのかと不安でいっぱいでした。そのなかで、講義や演習に対して必死に取り組んだことを覚えています。また、新しい友達ができたり、一緒に勉強して励まし合ったりしました。一人で勉強しても不安になっていたため、友達と助け合うことができたのは嬉しく、心強かったです。

日々の学びを通して、社会福祉や精神保健福祉への興味や関心が生まれ、資格取得を目指すようになりました。始めた頃は模擬試験の点数が悪く、これで合格できるのかと不安になりがちでした。なかなか思うように点数が上がらず、勉強を止めてしまいたいと思ったこともありましたが、スケジュールがあったため、やらなければならないと自分を追い込むことができました。また、模擬試験での点数から自分がどのくらいの順位で周りがどれくらいできているのかがわかるため、目安ができました。周りの人たちも勉強していると思えば、負けていられないと思いました。社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験を終えて、ほっとしています。しかし、資格取得はゴールではなく、スタートです。

これから社会人として働いていくことになりますが、今まで体験したことを活かし、頑張っていきたいと思います。

これまでお世話になった先生方、友達、家族には感謝の気持ちでいっぱいです。四年間本当にありがとうございました。

社会福祉士国家試験を終えて

社会福祉学部　社会福祉学科卒　工藤　大輔

２月６日に第34回社会福祉士国家試験を受験しました。４年次の秋頃から本格的に受験勉強に取り組みました。しかし、社会福祉士国家試験は私が考えていた以上に大変なものでした。分野が多く聞いたことのない単語や人物名が多く困惑しました。また就職活動も重なり勉強が億劫になった時期もありました。受験が近づくにつれ、友人や先生方に愚痴をこぼす日もありました。その時は一旦頭の中を整理するためになぜ、社会福祉士になりたいのか、自分の理想とする社会福祉士像はどういったものなのかを考え、改めて自分を見つめ直し自分の軸を定めました。

そして毎日問題を解き復習を繰り返し、分からないことは先生方や友人へすぐに質問し理解を深めていきました。着実に不得意な分野の苦手意識を克服し、得意な分野は確実に点数が取れるよう更に伸ばしていきました。多くの分野に分かれていましたが、勉強していくにつれてつながっていることを学びました。

家族や友人、大学教職員の皆さまの協力があってこそ合格することができたと、試験を終え日々感謝するとともに、ようやくスタートラインに立つことができたと実感しています。

私は４月から医療相談員の職に就きます。大学の４年間や受験勉強で学んだことを活かせるよう、これからも日々勉強し励んでいきます。そして、微力ではありますが地域に貢献し、支援が必要な人たちと福祉を繋ぐことができるよう一歩ずつ焦らず努力していきます。

卒業研究を終えて

看護学部　看護学科卒　千葉実穂里　山内　舞

私たち看護学部四年生は、実習や就職活動、国家試験勉強などと並行しつつ卒業研究を進めてきた。

私たちは「H大学女子看護学生の子宮頸がんワクチンに関する学年別の意識調査」について調査研究を行った。二〇二一年三月のニュースにて、大学生らが子宮頸がんワクチンを再度無料で接種できるよう三万人以上の書類を集め、厚生労働省へ提出したと報じられた。そこで私たちは、H大学の一～四年生の女子看護学生を対象に、学年別の子宮頸がんワクチンの意識について明らかにし、今後の子宮頸がん予防の一環であるワクチン接種の在り方について考察した。

調査に関しては、質問紙の内容は主に子宮頸がんに関する知識と子宮頸がんワクチンに関する意識であったが、プライバシーに配慮しながら項目を作成することが難しく、プレテストなどを実施して検討をしました。

調査結果より、子宮頸がんに関する知識は、子宮頸がんに関するウイルスや感染経路などの知識はあるが、正常値などは記憶の曖昧さが影響していることから知識は充分でない為、子宮頸がんに罹患するという危機感も講義をうけてすぐの時期よりは薄れてしまっているのではないかと考えられる。子宮頸がんワクチンに関する意識は学年が上がるごとに高く、講義を受講していることや実際にワクチンを接種していることが影響していると考えられる。

この研究で、学童期・思春期における子宮頸がんに関する健康教育は、その後の子宮頸がん予防に大きく影響する為、正確な情報提供・健康教育を大学の講義だけでなく、小学校から段階的に学び子宮頸がん予防に繋げていく必要があると学んだ。

看護学部の卒業研究発表会はコロナウイルス感染拡大の影響で中止となったが、ゼミ生間でリモートによりパワーポイントとを用いて発表を行った。今回の学びを卒業後の研究活動に活かしていきたいです。

文学部英語・英米文学科卒業論文口頭試問について

文学部　英語英米文学科　教授　佐藤　和博

２月１日（火曜日）午前９時から、英語英米文学科四年生（27名）の作成した卒業論文に対してその内容に関する口頭試問が実施されました。

例年であれば、主査教員一名と副査教員一名とで、学生一人ひとりに対して、対面で実施されるのですが、コロナ禍ということもあり今年はリモートで行われました。

事前に、開始時間を指定して一人当たり三十分の予定でタイムテーブルを組んでおきました。

スムーズに進行するのかと少し心配しましたが、案外、大きなトラブルもなく進みました。学生たちは多分パソコンの扱いは手慣れたものなのでしょう。

口頭試問の実際の姿はどのようなものか？大体のイメージとしては、まず、学生に自分の書いた卒業論文の概要について簡潔に述べてもらいます。その後、主に副査から、学生に対して質問があり、学生がそれに答えるという形を取ります。最後に、主査から質問やコメントがあって、やっと終了となります。学生は教員からの質問にうまく答えるときもあり、また、答えられず、黙ってしまうこともあったようです。そういう時は、指導教授としては、ハラハラする場面ではあります。

今年度の卒業論文のテーマ（分野別）としては、イギリス文学文化分野十名、アメリカ文学文化分野九名、英語学分野八名となっています。

以前は、イギリス、アメリカの文学作品を扱った卒業論文も多かったのですが、最近は、あまり文学作品は卒業論文のテーマとしては好まれないようです。

これも、時代の流れというものなのでしょう。主に、イギリス、アメリカの文化一般から、学生は、自分で関心を持った個別のテーマを選択するようです。

例えば、アメリカのヒップホップカルチャーとファッション、アメリカの広告戦略、イギリスの風刺画など、誠に興味深いテーマではあります。私たち教員が、むしろ、学生たちから教わることも多く、そのようなテーマを研究対象に選んだ学生の感性に対しては、大いに敬意を表するものです。

同時に、今後とも、さらに何らかの形で研究を続けてもらいたいものだと念願するものです。

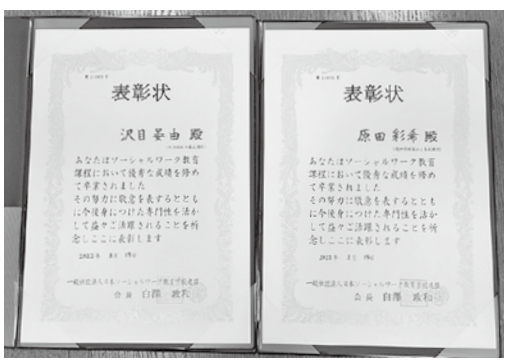
口頭試問が円滑に実施されたことに関して、協力して下さった学生及び英文科のスタッフに感謝します。

日本ソーシャルワーク教育学校連盟の成績優秀者表彰される

この度、二〇二一（令和三）年度の成績優秀者が決まりました。

この賞は、社会福祉士・精神保健福祉士養成課程修了者で、学業成績・人物ともに優秀である学生に対し贈られるものです。

日本ソーシャルワーク教育学校連盟成績優秀表彰者は、沢目晏由さん（社会福祉士養成課程）、原田彩希さん（精神保健福祉士養成課程）です。



祝卒業

大学生活を振り返り

二〇二一年度　理事長賞授与者

文学部　英　語・英米文学科　鈴　木　　滋
日本語・日本文学科　髙　橋　敦　史
社会福祉学部・社会福祉学科　能　呂　汐　里
看護学部・看護学科　外　崎　七　星

文学部　英語・英米文学科卒　鈴木　滋

散歩を日常的にするようになったのは、十八、十九の頃からである。やるせない事情があって、夜な夜な家を抜け出してはひとりさまよっていた。その頃の散歩は多分に逃避的であったが、この大学生活四年間の散歩には、もっと明るいもの、楽しいものがあった。散歩のよさを発見したのである。ほんの一部であるが、書いてみる。

春、夏辺りは、宵の散歩がよかった。胸がわくわくして、せつなくて、どうにかなってしまいそうであった。秋は一日の内のどの時間も、散歩に適していた。日差しを浴びて、じっとしていたこともあった。心地よい季節であったが、いつのまにかどこかへ行ってしまって、冬がやってきた。寒くてつらい思いをすることもあったが、いいこともあった。ゆっくりと雪の降る、静かな夜道を、てくてく歩いて、そうして、胸がいっぱいになったことがあった。

散歩のことについて書くのに少し飽きたので、別のことを書いてみようと思う。大学生活では、レポートを書いたり、パワーポイントでプレゼンの準備をしたりすることがよくあるが、僕はこれに苦しめられた。苦しめられたというのは、それらを書いたり、作ったりすることに、というのももちろんあるが、それ以上に、完成したそれらを後々思い出した時に、苦しめられた。恥ずかしい。どうして俺はこんなものを書いてしまったのだろう。この口調はどうにかならないのか、等々。そんな思い出もある。

大学生活が終わって、これから社会人としての生活が始まる。つまり、働いてゆくわけであるが、自信はない。不安ならある。たぶんいろいろ悩むことになるのだろうと思う。それを考えると多少憂鬱な気分になる。しかしまあ、がんばってやってみようと思う。この大学生活で得たものが生かせたらいいと思う。

最後に、仲良くしてくださった方々に感謝の気持ちを抱いています。これからもよろしくお願いします。

社会福祉学部　社会福祉学科卒　野呂　汐里

これからの学生生活に期待と不安を抱きながら大学に入学したあの日から４年。長いようで短かった大学４年間を今こうして振り返ってみると、楽しかったこと、辛かったことなどさまざま思い浮かびます。

私は、高校３年の時点で特に決まった夢や目標がなく、消極的な理由で学部を選び、入学しました。そのためか、大学に入学したばかりのころは、これまでとの学び方との違いや様々な課題に追われる日々で、意義を見出せず自分の選んだ道は間違っていたのでは?と思うときもありました。しかし、この大学生活でたくさんのことを学び自分の持つ価値感が変わり、これまでの学生生活の中で一番充実していたといっても過言ではないと感じています。

特に大きな学びを得たものを挙げるとするのであれば、社会福祉実習です。実習の中で社会福祉士としての専門的な知識や義技法を学べたことはもちろんですが、実習の中で改めて自己を振り返り、自分は何がしたいのか考えることができたと思います。

こうした実習だけでなく、友達や先輩方、先生方と関わる中で、様々な考え方に触れ学ぶことができました。なかには考え方の違い故に、友達や自分自身との葛藤にぶつかる時もありました。しかし、その度に考え、成長に繋がったのではないかと感じます。

このような充実した大学生活を送ることができたのは、様々なアドバイスをくださった先生方、先輩方、支えてくれた家族、そして辛い時も楽しい時も４年間共に遊び学び会えた友人のお陰だと強く感じています。本当にありがとうございました。

文学部　日本語・日本文学科卒　髙橋　敦史

大学卒業の時を迎えた今、四年間を振り返り、とても恵まれた環境で勉強をすることができたのだと改めて感じています。

私は大学に入学した時に、講義を受けるにあたって、主体的に学ぶということを目標にしていました。受け身の姿勢は大学では通用しないと考えていたからです。最初は、自分にこの目標の通りの学習ができるのか、不安の方が大きかったです。しかし、勉強をしていく中で様々な分野に対する興味が湧き、自然に主体的な勉強ができていたと感じます。

一方で、大変なことも多くありました。より自発的な学習が求められる三年生の時期に、それと並行して就職活動に向けた採用試験の勉強をしたこと、四年生になり、卒業論文と就職活動に取り組んだことなどが思い出されます。しかし、それ以上に四年間の大学での学習がとても楽しかったという気持ちの方が今は大きいです。

また、学科の専門の内容にとどまらず、幅広い分野の科目を履修したことで、自分の興味のある分野を深く学びながらも、広い視野をもって物事を捉えられるようになったと感じています。

さらに、専門科目の学習は自分の趣味もより豊かにしてくれました。小説や映像作品を以前よりも多角的な視点で、深く鑑賞できているように思います。

このように自分にとっての理想的な学習ができたこと、それによって自ら学ぶことの楽しさを感じたことは、大学生活の一番の思い出です。

四月からは就職し、新しい環境に身を置くことになります。学生から社会人になるにあたって、今まで以上に自分の言動に責任を持つことを心がけつつ、この四年間で身に着けた「自ら学ぶ姿勢」はいつまでも大切にしたいと思います。改めてこの四年間、支えてくれた全ての人に感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございました。

看護学部　看護学科卒　外崎　七星

大学での四年間の生活を振り返ると、長いようであっという間でした。しかし、短いように感じた大学生活は、とても充実したものでした。入学後にリトリートがあり、教員、同期の学生と一日過ごすことで、すぐにみんなと親しくなることが出来ました。大学生活は楽しかったこと、苦しかったこと様々ありました。大学三年の前期まで専門性のある分野の講義やテストが中心であり、テスト期間の学習は覚えることが多く、範囲も広いため辛く投げ出したいこともありました。しかし、そんな辛い中でも友人と一緒に勉強し、休憩中にふざけあうなど、楽しい時間を過ごすことで乗り越えることが出来ました。授業が終わってから友人とご飯を食べに行ったことや、休みの日にレンタカーを借りて遠出しに行ったこと、海に行ったこと等、友人との思い出は最高なものばかりでした。演習室で、友人と騒ぎすぎて注意されたことも今では良い思い出です。

コロナウイルスによる影響で、学内実習を行うことが多くなりましたが、このような状況の中でも病院実習に行けたことが印象に残っています。大学内での学習や知識だけでは学ぶことが出来なかったことが、病院実習を通して初めて理解することができ、病院実習の大切さを改めて感じました。また、病院実習最終日に患者さんに「ありがとう、これから看護師さんとして頑張ってね。」と声を掛けていただいたことは、心に残っています。これまで学習してきた看護が、患者さんのためになっていた、頑張ってきて良かったと嬉しくなりました。

四年間お世話になった教員、友人、家族、事務の方々には本当に感謝しています。四年間、本当にありがとうございました。